

73. スポーツによって生じた小転子の剥離骨折の1例

阿部圭宏 (清水厚生)

症例は13歳、男性、走り高跳びにて受傷した。治療は保存的に行い、経過は良好である。当外傷は、1939年に報告されて以来、全部で98例と、希な疾患である。発症の原因としては骨疲労現象が生じたところに、急激な牽引力が作用して生じた Stress Avulsion Fracture であると考えられた。受傷機転は、腸腰筋の収縮が関与するスポーツによるものが多かった。

74. 野球フルスイング打ち損じによる股関節前方脱臼の1例

笠原悌司 (都立府中)

股関節前方脱臼のうち Epstein 分類の superior type で、他院にて整復困難により救急転送された一例を経験した。腰椎麻酔下で、大腿骨長軸方向の牽引では整復出来ず、腹臥位股関節過伸展によって整復し得た。前方脱臼のほとんどは交通外傷によって起こるが、自家筋力による、しかも non-contact injury での脱臼に、完全大腿神経麻痺 (保存的経過観察) を合併した報告は渉猟し得た限りなく、極めて稀有な症例である。

75. 当院における外傷性股関節脱臼の治療と予後

洪 理江 (鹿島労災)

当院で経験した30例30関節のうち今回経過観察しえた26例26関節につき、受傷形態・整復までの時間及び免荷期間が臨床成績に及ぼす影響を検討した。脱臼整復までに24時間以上を要した症例では成績不良例が多かった。Thompson Epstein 分類IV型及びV型 (Pipkin III型) に経過中骨頭壊死を認めた。MRIにて受傷早期より経過をおえた8例中5例に骨頭内の輝度変化を認めたが、そのうち3例では受傷後1年以内に輝度変化が消失していた。

76. 大腿骨頸部の不顕性骨折の経験

高森尉之, 廣瀬 彰, 坂本雅昭
(市立海浜)

単純 X 線像にて明瞭な骨折所見を認めなかった、大腿骨頸部の不顕性骨折11例について、骨シンチを中心に検討を加えた。初回の骨シンチで確定診断が得られたのは7例であった。初回の骨シンチで確定診断が得られなかった4例の検査時期は、受傷後4日以内であった。中には、受傷後4日目の骨シンチで骨折を判定できなかったが、MRIで明らかとなった症例も見られた。

77. 大腿骨頸部外側骨折手術症例におけるγネイルとIMHSの検討

北崎 等, 土屋恵一, 小泉 涉
本田 崇 (県立佐原)

大腿骨頸部外側骨折30例に、γネイルおよびIMHSの固定術を行った。γネイルの2例で cut out をきたし内反股での変形治癒となったほかは、全例に骨癒合を得た。γネイル症例の cut out の原因は、Lag screw の形状およびそのスライド能の限界に起因すると考えられた。不安定型の骨折および骨粗鬆症の強い症例においては、γネイルにかわってIMHSが有用であると思われた。

78. 大腿骨頸部内側骨折に対する骨頭温存手術例の検討

新羽正明, 清水 耕, 永原 健
佐粧孝久, 中川晃一, 三橋 稔
(習志野第一)

比較的若年者の大腿骨頸部内側骨折、骨頭温存手術例12例 (平均年齢54歳) について骨頭壊死発生の有無を含め検討した。MRI上、Garden 分類 stage 3, 4 の6例全例に手術後2ヶ月前後より骨壊死を認め、そのうち cannulated screw を施行した2例に骨頭陥凹を生じたが、深腸骨回旋動脈柄付腸骨移植施行例では陥凹を生じなかった。骨頭壊死を生ずる可能性の高い Garden 分類 stage 3, 4 に対しては深腸骨回旋動脈柄付腸骨移植も有用と考えられた。